



TITLE:

表紙、目次、まえがき

AUTHOR(S):

松下, 佳代

CITATION:

松下, 佳代. 表紙、目次、まえがき. 京都大学高等教育叢書 2003, 16

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53955>

RIGHT:

京都大学高等教育叢書16

平成14年度公開実験授業の記録

平成15年3月

京都大学高等教育教授システム開発センター

目 次

まえがき	松下 佳代 ……	i
------	----------	---

第 1 章 公開実験授業 ― 1 年間のデータ

1 授業内容	……	1
1.1 授業ガイダンス（大山泰宏）		
1.2 2002年度年間授業計画（案）		
1.3 2002年度年間授業一覧		
2 2002年度公開実験授業の参加者数	……	10
2.1 単位取得者数		
2.2 授業検討会参加者数		
3 「授業に関するアンケート調査」結果より 《資料》 A. 授業に関するフィードバック（毎回授業終了後の授業評価）	藤田 志穂 ……	11

第 2 章 公開実験授業の記録

1 第 8 回公開実験授業（前期 7 月 15 日：井下 理 担当）		
1.1 【授業記録】	杉原 真晃 ……	19
1.2 【検討会記録】 《資料》 A. 第 11 回授業検討会（7 / 8）のまとめ（松下佳代） B. 授業案（井下 理）	藤井奈津子 ……	34
1.3 【授業分析】 授業計画と授業構成 ― 7 月 15 日授業（井下 理 教授担当）について ―	田中 每実 ……	43
1.4 【授業者によるリブライ】 公開実験授業の計画と事後検討とその省察	井下 理 ……	48

2 第20回公開実験授業（後期12月16日：大山泰宏担当）

2.1	【授業記録】	笹村 俊之 ……	55
2.2	【検討会記録】 《資料》 A. 第19回授業検討会（12/9）のまとめ（松下佳代） B. 授業案（大山泰宏）	藤井奈津子 ……	77
2.3	【授業分析】 大学授業における授業フレームの調整 —— 授業者へのVTRインタビューによる検討 ——	神藤 貴昭 ……	85
2.4	【授業者によるリプライ】 ビデオ視聴による授業検討会の可能性	大山 泰宏 ……	104

第3章 公開実験授業に関する研究報告

1	RA からみた公開実験授業	藤井奈津子 ……	111
2	研修と研究のあいだ —— 物語の交錯と一般化可能性 ——	松下 佳代 ……	114

ま え が き

松 下 佳 代

1. 今年度の公開実験授業について

今年度は、公開実験授業を始めて7年め、第二期（1999年度～）の4年めにあたる。

京都大学では、今年度よりセメスター制が導入された。公開実験授業にあてている授業科目も、前期が「ライフサイクルと教育A」、後期が「ライフサイクルと教育B」という名称になった。授業担当の方式は、第二期の過去3年と同じくリレー式である。授業内容については、年度当初に計画されたものと実際に実施されたものの両方を載せたので、両者を見比べていただきたい（第1章－1）。

学生の受講者数は例年に比べるとかなり減少した。例年は、ガイダンス時には教室に入りきれないほど学生が集まり、ミニレポートによって選考していたのだが、今年度はその必要もなかった。これはセメスター制導入にともない途中放棄も「不可」とされることになったので、学生が科目選択に慎重になったためだと思われる。後期は、前期の単位取得を履修の原則としたせいもあって、履修者数は40人を割り、教育学部1回生中心のかなり小ぢんまりとしたクラスになった（第1章－2）。

参観者数も、減少、固定化の傾向にある（第1章－2）。公開実験授業が学内・学外のFDを大きな目的の一つとしていてと考えれば、決して看過してよい事態ではない。来年度に向けて、新しい公開実験授業の形態を模索中である（第3章－2参照）。

今年度の公開実験授業では、毎回、授業終了後に学生による授業評価を実施した（第1章－3資料「授業に関するフィードバック」）。授業検討会では、授業評価が学生の受講態度に与えた影響、何でも帳の記述との関係などが議論された。また、前期の評価については、センター内の研究会で各回、各項目ごとの傾向などを検討するということもやった。ただし、この叢書では、授業評価の分析をあらためておこない公開するまでにはいたらなかった。第1章－3の「授業に関するアンケート調査」は、後期最終回の授業終了後に実施したものである。後期履修者はほぼ全員が前期履修者であったので（2名を除く）、「ライフサイクルと教育」の通年の授業に対する調査結果にもなっている。取り上げられたテーマや何でも帳を通じての相互行為、ディスカッションという授業形態についてはほとんどが肯定的に評価しているが、リレー式については賛否相半ばしていることが読みとれる。こうした結果を受けて、来年度は、前期リレー式、後期個人担当式で授業をおこなうことになった。

2. 今年度の叢書の構成について

(1) 授業記録

さて、昨年度までの叢書を目にされたことのある方は、今年度の叢書の構成が大きく変わったことに気づかれたと思う。昨年度までの叢書は、授業検討会の記録が主で、授業自体の記録は配布資料や何でも帳など断片的であった。授業記録が載せられた場合でも、それはかなり簡略化された形式のものだった。私は昨年度までセンターの外にいて、授業検討会の記録がありながら、その検討対象である授業そのものが不十分にしか記録されていないことに、もどかしさを感じていた。読み手には、検討会の議論が、具体的にどのような授業場面にもとづいておこなわれているのかわからないからである。

そこで、今年度の叢書では、授業記録を充実させ、できるだけ読み手も、この叢書を通じてヴァーチャルに公開実験授業に参加できるように心がけた。ただし、そのために、これまでのようにすべての回の授業をカバーすることはできなくなった。選ばれた事例は、第8回の井下理教官（慶應義塾大学SFC）担当の授業、および、第20回の大山泰宏教官（本センター）担当の授業の二つである。事例の選択にあたっては、前期と後期、外部の教官と内部の教官のバランスをとることとあわせて、学生による授業評価が相対的に高く、検討会も活発におこなわれた授業を選んだ。

授業記録は院生の二人に作成してもらった。参考になる資料をさがしてみte気づいたのは、大学授業についてはまともな授業記録が残されていない、ということだった。幼稚園から高校までの授業記録はかなりの蓄積があるにもかかわらず、である。院生の二人は苦労したと思うが、比較的よく授業の雰囲気を伝える授業記録になっているのではないだろうか。

(2) 検討会記録

今年度の検討会では、昨年度と違って、特別のツールや手続きは用いなかった。検討会は、《フィールドワーカーの報告→前回の検討会のまとめ→授業者からの報告→ディスカッション》という手順で進められた。今年度からの新しい試みは、授業の振り返りと授業者からの報告の間に、前回の検討会のまとめをはさんだことである。これは、検討会での議論を一回性のものに終わらせず論点を蓄積していくこと、前回の不参加者に検討会の文脈を共有してもらうことを意図したものである。当初の意図をどれだけ達成できたかについては心許ない。とくに論点の蓄積から一般化へつなげていくというもくろみはあまり果たせなかった。が、来年度も継続したいとは考えている。

(3) 授業分析と授業者によるリプライ

授業記録と検討会記録をふまえて、授業分析、さらにそれに対する授業者のリプライもつけることにした。二つの授業分析は異なるスタイルで書かれている。第8回の授業分析は主として検討会での議論にもとづき、さらに分析者独自の視点が加えられている。授業者のリプライもそれにそったものとなっている。両者の間には中身の濃い応答関係がある。一方、第20回の授業分析では、「VTRインタビュー法」という新しい方法が試みられ、リプライでは、その経験にもとづいて「ビデオ視聴による授業検討会」という提案がなされている。この授業分析ーリプライのスタイルと内容は、編集者の期待を超える意欲的なものであった。ビデオというツールの再評価も、来年度の検討会につなげていきたい。

(4) 総括的な研究報告

最後に総括的な研究報告を載せるのは、これまでの叢書と同じである。一つはRAとして参加した者の視点から、もう一つは新参者にして司会という役割をつとめた者の視点から、今年度の公開実験授業について感じ考えたことをまとめたものである。どちらかといえば周辺にいる人間からの——しかし「岡目八目」ということもある——研究報告として読んでいただきたい。

3. 来年度の叢書に向けて

今年度の叢書の編集を終えるにあたって反省しているのは、授業がほとんど授業者や参観者の側からのみ描かれているという点である。この半年間なり1年間なりで、学生がどう学び変化したのか、それについては、「授業に関するアンケート調査」結果や、授業記録に挿入された何でも帳の記述から、ほのかに感じ取っていただくしかない。

学生の学びの軌跡は、それぞれの何でも帳、毎回の授業評価、前期・後期のレポート（前期についてはレポート集も作成）、ミニレポート集（松下担当分）などに残されている。しかし、それらを総合し、学生の学びのプロセスと質を多角的に検討するという作業はおこなえなかった。これは、叢書のみならず、授業実践としての公開実験授業の問題点でもある。来年度の公開実験授業および叢書に残された大きな課題として受けとめたい。

執筆者紹介（授業担当順）

田 中 毎 実	（京都大学教授／高等教育教授システム開発センター）
大 山 泰 宏	（京都大学助教授／高等教育教授システム開発センター）
井 下 理	（慶応大学教授／総合政策学部）
溝 上 慎 一	（京都大学講師／高等教育教授システム開発センター）
米 谷 淳	（神戸大学助教授／大学教育研究センター）
神 藤 貴 昭	（京都大学助手／高等教育教授システム開発センター）
藤 岡 完 治	（京都大学教授／高等教育教授システム開発センター）
.....	
藤 井 奈津子	（京都大学大学院博士後期課程学生／大学院教育学研究科）
藤 田 志 穂	（京都大学大学院修士課程学生／大学院教育学研究科）

平成15年 3 月25日 印刷

非売品

平成15年 3 月31日 発行

発 行 京都大学高等教育教授システム開発センター
京都市左京区吉田本町（〒606■8501）
TEL 075－753－3087
FAX 075－753－3045

印 刷 (株) 北 斗 プ リ ン ト 社

京都市左京区下鴨高木町38■2（〒606■8540）
TEL 075－791－6125



Kyoto University's Library of Higher Education Research
RESEARCH CENTER FOR HIGHER EDUCATION